

## 松平定敬は箱館へ

郷土史家 西羽 晃

前桑名藩主・松平定敬（以下、定敬と略す）は柏崎を離れ、会津若松城に入り、さらに各地を移動して、明治元（1868）年9月に仙台に着いた。蝦夷に向かう榎本武揚が率いる旧幕府軍の軍艦と出会い、定敬とお付きの成瀬空右衛門、成合清、松岡孫三郎が旗艦の開陽丸に乗った。他に備中松山藩主・板倉勝静、肥前唐津藩世子・小笠原長行も同乗した。板倉勝静は桑名松平家の出身で、板倉家へ養子に行った人である。他の桑名藩士たちも別の船に乗った。10月21日に蝦夷の鷲木村（現北海道芽室郡森町）沖に到着した。

定敬・板倉・小笠原の3人は貴人であるので、乗船中は将校室を宛がわれたが、榎本軍にとっては、むしろ邪魔者のように思われていた。そして何事も1人できるように申し渡された。兵隊たちは鷲木村へ上陸して、箱館（函館）を目指して進軍した。定敬ら3人は遅れて鷲木村に上陸したが、鷲木村は人家も少なく、商店も少なくて不便なので、やがて近くの森村（現北海道芽室郡森町）へ移った。榎本軍が箱館を制圧したので、定敬ら3人は森村を出発し、峠下で一泊して11月15日頃に箱館に到着した。ここでの宿舎は弁天町の山田屋であった。

蝦夷へ渡った桑名藩士は20人ほどであったが、新選組に加入して、土方歳三の部下として戦争に参加した。その中に家老の沢采女、公用人の森弥一左衛門も居た。沢は家老であるが、殆ど役にたたなかったようで、ここでは森が改役、沢は改役下役であり、森の方が上役であった。桑名藩士の佐治寛は箱館で病死している。

箱館では定敬は外出する際は1、2人しかお伴が付かなかった。しかし、時々には榎本たちと共に料理屋で芸者を侍らすこともあった。また箱館在住のアメリカ人、フランス人、ロシア人とも交際した。しかし日々の生活資金にも事欠き、資金を得るため、松岡孫三郎が12月28日頃に外国船に乗って東京へ旅立った。宿屋では経費がかさむので、12月28日に定敬は山之上神明社の神職宅に移った。

12月24日には桑名藩家老・酒井孫八郎と部下の生駒伝之丞が箱館に到着した。酒井らは明治2年正月元旦に定敬と再会し、以後は酒井らが身の回りの世話をした。酒井は定敬が箱館から出ることを榎本や土方と協議した。また、定敬は英語の勉強をしており、孫八郎も一緒に英語を学んだ。定敬は桑名藩士たちを連れて、料理屋でドンチャン騒ぎをする

こともあった。桑名藩士の石井は鹿毛の馬を定敬に贈ったので、定敬は喜んで市中を乗り回している。



現在の山之上神明社（元の位置、建物とは違う）

正月中旬ころには、上海への渡航の話も出たが、何分にも旅費もなくて決めかねた。取りあえず、2月15日に生駒伝之丞はフランス人の斡旋で船に乗って、連絡のため東京へ向かった。年末に東京へ向かった松岡孫三郎は後藤多蔵、平松屋寅吉と共に3月7日に箱館に着いた。おそらく東京の情勢を伝えるとともに、資金を持って来たのだろう。平松屋は桑名藩の飛び地である柏崎の出身で横浜の貿易商人であった。3月末には新政府軍の軍艦が箱館へ攻めてくる情報を得て、海外への渡航を迫られたが、適当な船もなかった。

春になり梅花は盛りで、桜は僅かに開きかけであった。しかし、新政府軍の軍艦が青森に集結し、箱館に攻めてくるのが確実になった。箱館の人たちは避難するために市内は混乱し、外国人は箱館から船で脱出した。4月5日午後定敬・板倉・小笠原が集まった席で、榎本から箱館を立ち退き、室蘭沖に用意してある船に乗るようにと言われた。いよいよ降伏への道を辿ることになる。